

Title	ゲートキーパー(gatekeeper)論に関する一考察
Sub Title	A review on the gatekeeper studies in mass communication research
Author	李, 光鎬(E, Gwangho)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1992
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.34 (1992.) ,p.1- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000034-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゲートキーパー (gatekeeper) 論に関する一考察

A Review on the Gatekeeper Studies in Mass Communication Research

李 光 鎬

Gwangho E

In the years since the publication of David M. White's (1950) classical "Mr. Gate" study which firstly introduced Kurt Lewin's (1947) 'gatekeeper' concept into mass communication research, there has been an increasing concern to the factors having influence upon the decision making of mass communicators. Those factors found in many empirical studies include subjective bias of individual gatekeeper, reporter—source relationships, proportions of input news from wire services, and organizational hierarchy.

The focus of gatekeeper studies has shifted from an emphasis on individual psychology, as in White's study, to an awareness of the importance of organizational context in which gatekeeping activities occur. And recently, more molar levels of analysis are employed in order to overcome the limitations of classical gatekeeper model. Some conceptual and methodological limitations are reviewed and suggested herein this paper for revision of the model. New conceptual framework such as 'mass media decision making' suggested by Dimmick and Coit (1982) may be considered as one candidate for alternative paradigm to gatekeeper studies. But further examination is still needed.

1. はじめに

マス・コミュニケーション過程の送り手であるマス・メディア組織とその組織構成員であるマス・コミュニケーターに関する研究の相対的立ち後れは、しばしば指摘されてきたとおりである。その立ち後れの理由としてはマス・コミュニケーション研究における初期の問題意識が受け手の相対的主体性の確立をめざす受容過程研究に集中したこと（早川ほか、1971: 16-24）、また方法論的に、送り手への接近が難しく、調査技法が定式化されていなかったことなどが考えられる。

しかし、立ち後れはあくまでも相対的なものであり、送り手やマス・コミュニケーターに関する研究が、それなりの展開を見せてきたのも事実である（P. Elliott, 1977: 142）。なかでも特に、Kurt Lewin (1947) のゲートキーパー概念に着目し、主にアメリカの研究者たちによって進められてきたゲートキーパー研究は、代表的な

マス・コミュニケーター研究の一つであると言えよう。

この論文では、David M. White (1950) の先駆的研究を出発点とするゲートキーパー研究が、どのように展開してきたかを批判的に検討し、その概念的・方法論的問題点を明らかにすることを目的とする。

2. マス・コミュニケーション研究へのゲートキーパー概念の導入

ゲートキーパー概念は、Kurt Lewin が第2次世界大戦期間中、主婦たちの食料品購買行動から考案したものである。彼は、食料品がどのようにして家庭の食卓に届くのかという問題について調査を行い、「通路理論 (channel theory)」を提案した。すなわち、食料品はある通路を通して家庭の食卓まで届き、食料品の種類によって異なったパターンでの通路を通る、ということである。Lewin (1947: 145) は、「食料品が……通路に入るか否か、そして通路の中のある部門から他の部門へ移動

するか否かはゲートキーパーに影響される」とし、「ゲート領域」は「公正なルールまたはゲートキーパーにより」管理されると考えた。

彼はまた、このようなことが「食料品の通路だけではなく、特定のコミュニケーション・チャンネルを通じてある集団へニュース・アイテムが流入される場合、商品の流通、そして多くの組織への個人の社会的移動などの場合にも」適用できるとし、ゲートキーパー概念がマス・コミュニケーション分野へ導入される契機を与えた。

この概念を最初にマス・コミュニケーション分野へ持ち込んだのは、David M. White (1950) であった。彼は、次節で詳しく述べるように、新聞社のワイア・エディターをマス・コミュニケーション過程におけるゲートキーパーであると考え、そのワイア・エディターがどのような基準に基づいて、通信社から送られてきた「ニュース・アイテム」を次の段階へ通したり、通さなかったりするのかを調査したのである。

しかし、Abraham Z. Bass (1969: 71) によると、Lewin が考えていたゲートキーパーとは「特定の小集団（例えば、家族）が使用するものを決定するその小集団の構成員」であり、従ってマス・コミュニケーション分野への正しい適用は、家族のような小集団のニュースアイテム入手パターンに関する問題になるはずであった。具体的にいえば、家族構成員の中の誰によって、その家族が利用するニュース・アイテムが決定されるのか、またそのゲートキーパーの意思決定には、どのような社会的・心理的圧力が作用するのか、といった問題がマス・コミュニケーション研究におけるゲートキーパー論の中心課題になるはずであったと、Bass は主張しているのである。

Lewin が小集団に研究の焦点を置いていたことを考慮すれば、Bass の指摘が妥当であることは確かである。しかし、必ずしも Lewin が、家族のような小集団に限ってゲートキーパーの存在を認めたわけではない。「……通路の中のある部門から他の部門へ移動するか否かはゲートキーパーに影響される」という記述からも明らかのように、Lewin は通路の各段階ごとにゲートキーパーの存在を想定していたのである。従って、White がゲートキーパー概念を受け手小集団ではなく、マス・コミュニケーションに適用したのは必ずしも誤った適用ではないと言えよう。

しかし、White によるゲートキーパー概念の導入に対して一つ指摘しなければならないことは、「最初の診断

的 (diagnostic) 課題は実際のゲートキーパーを発見することである」という Lewin の記述を引用しながらも、誰がゲートキーパーであるかを診断する概念的作業を充分に行わなかったことである。

3. ゲートキーパー研究事例の検討

以下においては、White の研究に端を発するゲートキーパー研究の事例を検討し、その研究結果をまとめる。ゲートキーパー研究の問題意識は、ゲートキーパーの意思決定に影響する要因の探求に集中している。従ってここでは、各研究が目した影響要因を基準に研究事例を分け、検討を進める。

3-1. ゲートキーパーの主観性に注目した研究

David M. White (1950) は、アメリカ中西部の工業都市で発行しているローカル新聞社のワイア・エディター1人を対象に、彼がどのような基準に基づいて、ニュースの選択を行っているのかを調査した。White は、1週間の間3つの通信社 (AP, UP, INS) から送られてきた記事の中から、特定の記事が選ばれなかった理由をそのワイア・エディターに直接書いてもらう方法で、ニュースの選択基準を解明しようと試みた。その結果、大きく分けて2つの理由から特定のニュースが掲載されなかったことが判明した。その1つは、「報道する価値がない」という理由であり、もう1つは「その事件に関し、他の通信社の記事を掲載した」という理由であった。しかし、一番目のカテゴリーに分類された理由のなかには「偏向報道である」、「プロパガンダである」、「文章が良くない」などの理由が含まれており、これらの理由を White は、非常に主観的な価値判断に基づいたものであると考えたのである。二番目のカテゴリーのなかにも「APからの記事が良かったのでそれを使った」、「INSからの記事がもっと面白かったのでそれを使った」などの主観的理由が含まれていたことを彼は重視した。White (1950: 390) は、このような調査結果に基づいて、「ニュースのコミュニケーションがいかに主観的であるのか、またいかにゲートキーパーの個人的な経験と態度、期待に基づいているのかが分かる」と結論づけたのである。

White の研究から17年経った時点で、Paul B. Snider (1967) は、White の調査対象と同一人物を対象に、White の調査方法をそのまま利用して反復調査を行った。その結果、特定のニュースが掲載されなかった理由は、17年前とほぼ同じ内容であったものの、非常に主観的な理由は見つからなかった。また、記事の内容を13のカテゴリーに分け、その構成比を検討したSniderは

通信社から送られてきた記事も、その中からワイア・エディターが選択した記事も、17年前よりバランスのとれたものになっているとの結論を下した。¹⁾

Flegel and Chaffee (1971) は、アメリカのウィスコンシン州にある2つの新聞社の記者17人を対象にした質問紙調査と13件のトピックに関する記事の内容分析を行い、記者個人の意見と記者が知覚した編集者の意見、そして記者が知覚した読者の意見が、記事の内容にどれほど影響するのかを分析した。その結果、記者個人の意見と記事内容の間に高い相関があることが確認され、記者の個人的意見が記事の内容に影響する重要な要因であることが判明した。しかも、質問に答えた記者たちは、このような影響があることを自ら認識し、認めていたのである。

そのほかに、記者33人とインタビューを行い、記者たちが記事を作成するとき、頭の中に思い浮かべる「想像上の受け手」の影響を調査した Pool and Shulman (1959)の研究などがゲートキーパーの個人属性に注目した研究として挙げられる。

3-2. 通信社の影響に注目した研究

ワイア・エディターを対象にした多くのゲートキーパー研究は、彼らのニュース選択行為が通信社からのニュース・インプットに影響されていることを検証している。

Walter Gieber (1956) は、アメリカのウィスコンシン州で発行している新聞社の16人のワイア・エディターとインタビューを行い、彼らのニュース選択行動に影響する要因を調査した。その結果、発行人や編集責任者の編集方針は全体的にみて重要な要因ではなく、通信社(ここではAP)のニュース判断が重要な要因であることが分かった。

また Gold and Simmons (1965) は、アメリカのアイオワ州で発行している24の新聞を対象に、通信社から送られてきた記事とそこから各新聞が掲載した記事を13のカテゴリーに分け、24社間のアウトプット記事におけるカテゴリー別の順位一致度を求めた。²⁾ その結果、各新聞は通信社からのインプット記事をどれくらい掲載しているのかという点においてはかなりばらつきがあったにもかかわらず(最も少ない量を掲載した新聞において5.4%、最も多く掲載した新聞において58.3%)、掲載した記事のカテゴリー別順位においては24社がほとんど一致していた(一致度係数は.915)。³⁾ Gold and Simmons は、このような傾向に対し、24社が掲載した記事のカテゴリー別順位の平均順位と通信社からのインプ

ット記事におけるカテゴリー別順位が非常に似ていることを指摘し、通信社の影響が作用していることを示唆したのである。⁴⁾

ゲートキーパーの主観的判断に注目して集められた White のデータと Snider のデータに対する再分析を行い、そのデータから通信社の影響を検出した研究もある。

まず Paul M. Hirsch (1977) は、White (1950) のデータに対する再分析を行い、通信社からのインプット記事とゲートキーパーが選択したアウトプット記事とがカテゴリー別の構成比においてほとんど一致していることを発見し、そのゲートキーパーが、彼自身の意識とは無関係に、通信社からのニュース・インプットに影響されていたのであると主張した。彼はニュースの取捨選択の理由に関する White の解釈に対しても異議を唱え、個人的な偏向よりも職業規範に基づいた基準でニュースの選択が行われていたとの見解を示している。また議題設定論で有名な McCombs and Shaw (1977) は、White のデータにおいてカテゴリー別に分けたインプット記事とアウトプット記事の量的順位の間には.64の相関が、また Snider の17年後のデータにおいては.80の相関があったことを発見し、通信社の影響があったことを支持した。

そのほか、Whitney and Becker (1982) がアメリカのオハイオ州にある新聞社と放送局の編集者46人を対象に実施した実験的調査においても、カテゴリー別に分けたインプット記事とアウトプット記事の構成比の間に高い相関関係(Pearson $r=.71$)が確認されている。⁵⁾

以上の調査結果を見る限り、ワイア・エディターのニュース選択行為は、通信社からのインプット記事のカテゴリー別量的分布に影響されるものと考えられる。

3-3. 組織要因に注目した研究

ゲートキーパーが組織の構成員であることを重視し、彼らが組織内のヒエラルヒーからどのような影響を受けているのかといった問題に焦点を当てた研究は、Warren Breed (1953)の研究を出発点としている。Breed は、自身の新聞社勤務経験とアメリカ北東部にある新聞社の記者120人とのインタビュー・データに基づき、発行人及び経営幹部らが設定する組織の方針が、記者たちに受け入れられるようになる組織内のメカニズムを明らかにした。

まず最初にあげられるメカニズムは、組織内社会化、すなわち組織の方針の学習過程である。方針の学習とは、新入記者が自分の地位に与えられている権利と義務及

び規範と価値を発見し、内面化する過程と定義される (Breed, 1953: 182)。具体的には、自社新聞の閲読、原稿修正などの編集行為、編集会議などを通じての上司との接触、ベテラン記者との非公式的な接触などが社会化の手段として示されている。

このようにして学習された組織の方針は、逸脱に対する制裁、上司への尊敬と義理、昇進への願望、方針に対抗する集団行動の不在、職業への満足(職場の親密な雰囲気、仕事に付随する非金銭的な役得などが満足をもたらす)、ニュース収集への優先的価値付けなどにより維持される。しかし、ニュース組織の方針は必ずしも明確に規定されていないため、ある程度の逸脱許容範囲は存在する。また、組織の幹部陣より取材スタッフの知識や情報が優れている場合、記者の能力や知名度が高い場合、無視できないほど事件が重要である場合には方針からの逸脱が許されることもあると、Breed はつけ加えている。

発行人の態度が記者の活動に影響を及ぼすという Breed の仮説は、Lewis Donohew (1967) によっても支持された。Donohew は、医療保障制度に関する記事の内容分析を行い、その結果と医療保障制度に対する発行人の態度、知覚された地域社会の世論、地域社会の実際状況との相関関係を分析した。その結果、発行人の態度が記事の内容に影響する重要な要因であることが検証されたのである。

また、David R. Bowers (1967) は、アメリカの日刊紙 613 紙を対象に発行人の活動に対する編集局長の評価を調査し、発行人の積極的な介入がなされる具体的な状況を示した。その中のいくつかを列挙すると、①地理的に近接したところで起きた事件であるほど発行人の介入は積極的になる、②発行部数が多い新聞社ほど発行人の介入は非積極的である、③社会的イシューより新聞社の収益に影響を及ぼす可能性がある内容に対し介入が行われる、④発行人の介入は、掲載の可否決定よりも内容やディスプレイにおいて顕著に現れる、などである。

一方、Bailey and Lichty (1972) は、アメリカの 3 大ネットワークの一つである NBC がベトナム戦争関連の衝撃的なニュース映像を放映するまでの意思決定過程を観察し、個人的な行動のように見える NBC スタッフの意思決定は、実は強力なジャーナリズムの規範に支配されていたとの結論を出している。また彼らは、NBC 内部の非公式コミュニケーション・ネットワークと公式コミュニケーション・ネットワークが意思決定の個人性を減らすように働いていたことを強調し、「組織がゲートキ

ャーであった」との最終的結論に達している。

3-4. 取材源との相互作用に注目した研究

記者は記事を書くために情報収集活動を行い、その過程で取材源と接触する。特に、番記者や専門分野を持つ記者たちは、限られた取材源と日常的に接触する。Gieber and Johnson (1961) は、市庁舎の番記者たちに対する参与観察とインタビューから、日常的に相互作用する記者と取材源(ここでは市の委員や行政官)の関係について次のような結論を出している。

[市の委員や行政官]は、説得と社交を用い、記者を彼らの準拠枠に同化させようと試みる。(中略)記者たちの「行動の理念的基盤」は、ジャーナリストとしての使命感や「公衆への奉仕」といったシンボルから成り立っている……。しかし、番記者という職務の社会的範囲には、政治的官僚制の公式構造と、取材源と同僚との関係に内包されている非公式的な社会構造が含まれる。記者たちが、取材源による同化の試みに公然と抵抗するとはいえ、彼らは「公衆への奉仕」というシンボルを、市に対する強い「内集団の忠誠心」(ingroup loyalty)へと弱体化させてしまうのである。(Gieber and Johnson, 1961: 297)。

すなわち、取材源との日常的な相互作用(とりわけ非公式的な相互作用)の中で、記者の行動規範が実現されるのは困難になり、両者の「理屈」からはそもそも異なるはずの取材源と記者の目標が、相互作用の進行につれてある程度重なるようになる、ということである。

イギリスの犯罪事件担当記者を対象に参与観察とインタビューを行い、取材源(ここでは警察)と記者との関係が報道にどう影響するかを調べた Steve Chibnall (1975) は、次のように述べている。

[Gieber and Johnson が同化と呼んだ取材源の試み]は、事実上、一つの複雑な社会化過程であり、それによってジャーナリストの準拠枠、業務遂行の方法、そして記者個人の知覚及び理解の体系が、彼の取材源の期待と調和するようになる。……[ジャーナリスト]は取材源の都合の悪いときに情報を求めなくなり、取材源の抱える問題に同情するようになり、与えられた情報を忠実に報道するようになる。(中略)取材源の期待を満足させることにより、記者は良い記事をもらうだけでなく、取材源から尊敬さ

れるようになる (Steve Chibnall, 1975: 59-60)。

このような取材源との協調関係は、情報収集段階だけではなく、収集した情報を記事に書き上げる时候にも影響を及ぼし、取材源に対する批判を躊躇する傾向が生まれるようになる、Chibnall は指摘している。このような傾向は、取材源との「長い関係、共通の経験、そして共有された視点・価値・利益などがもたらす結果」(Chibnall, 1975: 62) なのである。

4. ゲートキーパー論の概念的・方法論的問題点

White によって始まったマス・コミュニケーション分野におけるゲートキーパー研究は、以上において概観したように、ゲートキーパーに影響する社会的・心理的要因を発見しようとする努力を重ねてきた。このような問題意識の背景に、ゲートキーパーの行為によりマス・コミュニケーションの送り内容が変わるという前提があったことは言うまでもない。こういう点から考えてみると、最近、特にジャーナリズム研究分野においてニュースの内容に影響する要因が注目されるようになったのは、ゲートキーパー論の一つの拡張であると言える。しかし、それは単なる拡張ではなく、ゲートキーパー論に対する批判的認識から生まれた一つの発展であるとも考えられる。以下においては、そのゲートキーパー研究にどのような問題点があるのかを概念的な側面と方法論的な側面に分けて考察する。

4-1. ゲートキーパー論の概念的の問題点

まず最初に指摘すべきゲートキーパー論の概念的の問題点は、それが集团的・組織的活動の産物であるマス・コミュニケーションの送り内容を個人行為の単純合計として捉えていることである。個人の特性をそのまま集団や組織に一般化することが困難であるように、集团的・組織的活動を個人の行為で説明することは、還元主義的誤謬に陥りかねない。このような問題点は、特に初期のゲートキーパー研究によく見られるもので、一人のワイア・エディターに対する調査結果を根拠に、「ニュース・コミュニケーション」全体の主観性を主張した White (1950) の考え方がその典型例であると言える。

次にゲートキーパー研究は、必然的に個人を分析対象にするため、マス・コミュニケーションの送り内容に影響する巨視的次元の要因が考慮されにくくなるという問題点がある。例えば、市場からの影響、関連産業からの影響、法的制度からの影響、さらには国家を越えた次元での影響などは、個人の知覚もしくは個人の行為を媒介

項としては説明できない側面があるのである。そのため、ニュースの内容に影響する要因の全体図を把握しようとする試みに対し、ゲートキーパー論は限定的な有用性しか持たないものと考えられる。

第3の問題点は、Steve Chibnall (1975: 49-50) が指摘しているように、ゲートキーパー研究がニュースの流通・処理過程に重点をおくため、ニュースが生産される側面が無視されることである。Chibnall は、次のように述べている。

表面的には魅力があるが、[ゲートキーパー]モデルはわれわれを誤り導き、ニュース製作における非常に重要な要素と過程が見えないようにする。記者は地面に落ちた林檎を拾うようにニュースを収集したり、記事を選んだりするのではなく、取材源からもらった大量の生の資料から情報の断片を選び出し、ジャーナリズムの慣行にしたがって組織することにより、ニュースを「作る」のである。……[中略]しかし、ニュースの構成過程において記者は彼自身が直接事件を知覚することはほとんどない。彼が入手する生の資料は他者(取材源)によって選択的に選別されたものである場合が普通なのである。

このような視点を取ると、ワイア・エディターや記者のようなマス・コミュニケーターではなく、記者に与える情報を選別する取材源の方が第一のゲートキーパーになるのである、という Chibnall の指摘は妥当であると思われる。

4-2. ゲートキーパー論の方法論的問題点

ゲートキーパー研究における最大の方法論的問題点は、調査対象の代表性である。マス・コミュニケーターへの接近の難しさは、代表的な標本抽出をほとんど不可能にしている。そのため、各々の研究はケース・スタディの水準にとどまらざるを得なくなり、したがってその研究結果を一般化する事は非常に困難になるのである。これはゲートキーパー研究だけに限る問題点ではなく、マス・メディア組織およびマス・コミュニケーターを対象とするすべての研究が抱える問題点でもある。

次に挙げられる問題点は、研究デザインに関するものである。初期のゲートキーパー研究はゲートキーパーに作用する影響要因を排他的に捉え、他の次元における要因を統制せずに一つの次元における要因だけを研究デザインに取り入れている。しかし、Hirsh (1977: 21) が指摘しているように、ゲートキーパーの意思決定は複数の

次元における要因から同時に影響を受けていると考えるのが妥当であり、従ってある一つの次元における影響要因を発見する研究デザインよりは、複数の次元における影響要因の説明力を比較する研究デザインが必要になるのである。

5. ま と め

以上、マス・コミュニケーション分野におけるゲートキーパー論の代表的な研究事例を概観し、その概念的・方法論的問題点を述べてきた。しかし、ここで概観したゲートキーパー研究は、当然ながらゲートキーパー論全体の一部にすぎない。また、ゲートキーパー論は、ここで整理した内容よりもっと複雑な形で展開してきている。これらの点を十分に論じることができなかったのは本論文の限界である。

White によって始まったゲートキーパー研究は、ゲートキーパー個人に対する関心から組織という文脈の中のゲートキーパーに対する関心へと展開し、最近はより巨視的な文脈の影響を考慮する方向へと進んでいる。しかし、すでに述べたように、巨視的な次元における要因を考慮するためには、調査対象をゲートキーパーという個人からマス・メディアという組織へと変えなければならない。Dimmick and Coit (1982) が「マス・メディアの意思決定」という概念で、ゲートキーパー論から最近の研究までを包括しようとしたのも、このような理由からであろう。⁹⁾ また、ゲートキーパー概念よりはゲートキーピング概念に注目し、マス・メディアによるゲートキーピング行為を社会システム全体における情報統制の一つとして考えようとした Donohue ら (1972) の試みも同じ流れを汲んでいると言える。

しかし、このような概念修正に対しても検討を加える必要はまだ残っており、その検討に応じた方法論の整備はこれからの研究に課された急務であると考えられる。

注

- 1) カテゴリーの内訳は、人間興味 (human interest)、犯罪、災難、州政治、連邦政治、国際政治、国際経済、国際戦争、労働問題、国内経済、(国内) 農業、(国内) 教育、(国内) 科学の 13 項目であった。
- 2) カテゴリーの内訳は、経済活動、スポーツ、政府の公式活動、社会・家庭、犯罪・非行、事故・災難、外国関連、宗教・教育・科学、天気、連邦政治、州政・市政、芸術、その他の 13 項目であった。
- 3) この一致度係数 (coefficient of concordance) の

変化範囲は、0 (最大不一致) から 1 (完全一致) である。なお、Whitney and Becker (1932: 60-61)、Guido H. Stempel III (1985: 791) は、この一致度係数が通信社からのインプット記事と 24 社が選択したアウトプット記事との間のカテゴリー別順位一致度であると述べているが、それは誤りである。Gold and Simmons (1965) は、インプット記事と 24 社のアウトプット記事との間にどれくらいのカテゴリー別順位相関があるのかを計算していない。

- 4) Gold and Simmons (1965): 427) のデータを若干修正し、24 社がインプット記事の中から選択した記事のカテゴリー別平均順位と通信社からのインプット記事のカテゴリー別順位との相関係数を計算してみた結果は .846 (Goodman & Kruskal の係数) であった。
- 5) カテゴリーの内訳は、国際 (政治・経済・戦争)、連邦政治・州政治、国内 (経済・農業・教育・科学)、人間的興味、犯罪・非行、事故・災難、労働問題の 7 項目で、White (1950) と Snider (1967) のカテゴリーを省略した形を取っている。
- 6) Dimmick and Coit (1982) は、マス・メディアの意志決定に影響する要因を、超国家・間国家次元、社会的次元、産業・組織間次元、超組織次元、地域社会・市場次元、組織内次元、公式・非公式集団次元、対 (dyadic) 次元、個人的次元の 9 つに分け、既存研究を整理している。

参考文献

- 早川善治郎、小川 肇、「わが国のマス・コミ研究の現状について—日本型マス・コミ理論の成立」、『放送学研究』22, 1971, pp. 5-46.
- Bailey, George A. and Lawrence W. Lichty, "Rough Justice on a Saigon Street: A Gatekeeper Study of NBC's Tet Execution Film," *Journalism Quarterly* Vol. 49, Summer 1972, pp. 221-229.
- Bass, Abraham Z., "Refining the 'Gatekeeper' Concept: A UN Radio Case Study," *Journalism Quarterly* Vol. 46, Spring 1969, pp. 69-72.
- Bowers, David R., "A Report on Activity by Publishers in Directing Newsroom Decisions," *Journalism Quarterly* Vol. 44, Spring 1967, pp. 43-52.
- Breed, Warren, "Social Control in the News Room," *Social Forces* Vol. 32, 1953, pp. 326-335.
- Chibnall, Steve, "The Crime Reporter: A Study in the Production of Commercial Knowledge," *Sociology* Vol. 9, January 1975, pp. 49-66.
- Dimmick, John and Philip Coit, "Levels of Analysis in Mass Media Decision Making: A Taxonomy, Research Strategy, and Illustrative Data Analysis," *Communication Research* Vol. 9, January 1982, pp. 3-32.
- Donohew, Lewis, "Newspaper Gatekeepers and Forces in the News Channel," *Public Opinion Quarterly*

- Vol. 31, Spring 1967, pp. 61-68.
- Donohue, George A., P. J. Tichenor, and C. N. Olien, "Gatekeeping: Mass Media Systems and Information Control," in F. G. Kline and P. J. Tichenor (eds.), *Current Perspectives in Mass Communication Research*, Sage, 1972, pp. 41-69.
- Elliott, Philip, "Media Organizations and Occupations: An Overview," J. Curran, M. Gurevitch, and J. Woollacott (eds.), *Mass Communication and Society*, Sage, 1977, pp. 142-173.
- Flegel, Ruth C. and Steven H. Chaffee, "Influences of Editors, Readers, and Personal Opinions on Reporters," *Journalism Quarterly* Vol. 48, Winter 1971, pp. 645-651.
- Gieber, Walter, "Across the Desk: A Study of 16 Telegraph Editors," *Journalism Quarterly* Vol. 33, Fall 1956, pp. 425-432.
- Gieber, Walter and W. Johnson, "The City Hall 'Beat': A Study of Reporter and Source Roles," *Journalism Quarterly* Vol. 38, Summer 1961, pp. 289-297.
- Gold, David and Jerry L. Simmons, "News Selection Patterns among Iowa Dailies," *Public Opinion Quarterly* Vol. 29, Fall 1965, pp. 423-430.
- Hirsch, Paul M., "Occupational, Organizational, and Institutional Models in Mass Media Research: Toward an Integrated Framework," Paul M. Hirsch et al. (eds.), *Strategies for Communication Research*, Sage, 1977, pp. 13-42.
- Lewin, Kurt, "Channels of Group Life," *Human Relations* Vol. 1, 1947, pp. 143-153.
- McCombs, M. and D. L. Shaw, "Structuring the 'Unseen Environment'," *Journal of Communication* Vol. 26, Spring 1977, pp. 18-22.
- Pool, Ithiel de Sola and I. Shulman, "Newsmen's Fantasies, Audiences, and Newswriting," *Public Opinion Quarterly* Vol. 23, Summer 1959, pp. 145-158.
- Snider, Paul B., "'Mr. Gates' Revisited: A 1966 Version of the 1949 Case Study," *Journalism Quarterly* Vol. 44, Autumn 1967, pp. 419-427.
- Stempel III, Guido H., "Gatekeeping: The Mix of Topics and the Selection of Stories," *Journalism Quarterly* Vol. 62, Winter 1985, pp. 791-796.
- White, David Manning, "The Gate Keeper: A Case in the Selection of News," *Journalism Quarterly* Vol. 27, Fall 1950, pp. 383-390.
- Whitney, D. Charles and Lee B. Becker, "'Keeping the Gates' for Gatekeepers: The Effects of Wire News," *Journalism Quarterly* Vol. 59, Spring 1982, pp. 61-65.